玉蘭女史遺詠

特258
974

始

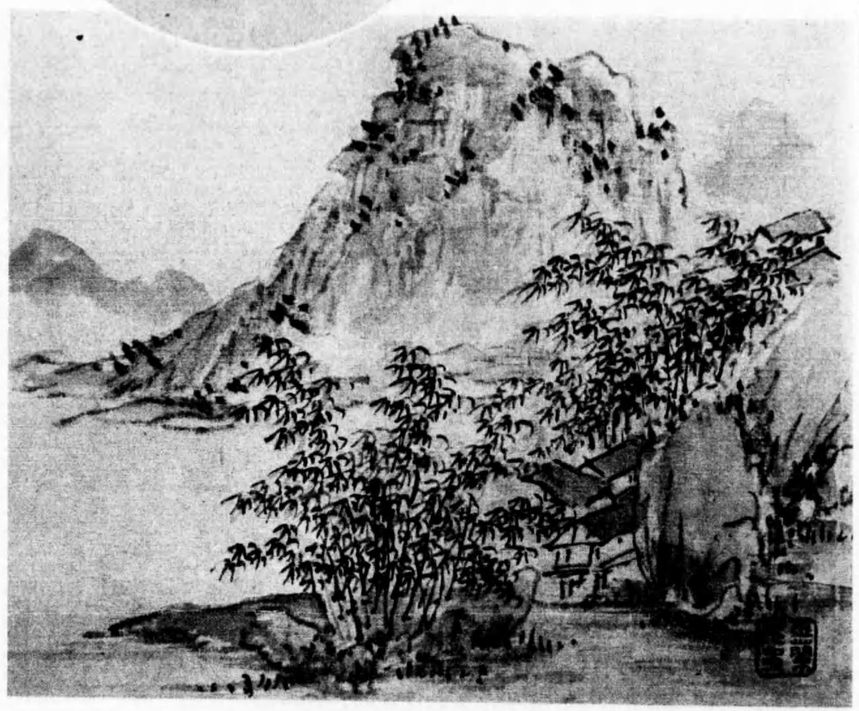
特258
974

玉蘭女史遺詠

昭和年間
帝國圖書館

一幅乾坤墨未乾亭亭高峰老根蟠築室何得栖仙鶴寫色千年紙上看

玉蘭女史



小傳

玉蘭女史名は旭子、故正二位中院通富卿の第五女なり。母は先代通繁卿の女千代子、實母は某氏、慶應二年九月九日京都石藥師の邸に生る。依りて旭の字を名とし、國音天留子と稱す。玉蘭はその號にして、初め玉調、一に槐陰といひ、後改めて專ら玉蘭女史を號とせり。女史に四姉二弟あり、一姉は故鍋島侯の室となり朞年にして疾を得て歸家し、一姉は水戸德川侯に嫁して一女を擧げ、最も親交ありしが早く世を去り、二姉亦た早世す。其の家初め嫡子なく、故從一位德大寺公純卿の三男を迎へて家を嗣がしむ、卽ち現中院家の先代故從三位通規にして、女史の家兄となる。今や皆既に亡く、二弟のみ世に在り、一弟は出でて家を分ち、一弟は他家に入り、共に耳順を過ぎてなほ健在なり。

女史幼より和歌に親しみ畫を好み又詩書を學ぶ、畫は谷口藹山に就きて業大に成り山水に巧みなりき。その學校に入るや學業常に優れ、賞を受くること數次、嘗て　明治天皇學校に臨幸し給ひし時、選ばれて御前に賜題の和歌を詠じ、自ら書して天覽に供し奉り、優賞下賜の恩命に浴し、又仙洞御所の鐘秀會に列し、詩を賦し辭を呈して貴紳の褒稱を得たりといふ。十四歳の時、東本願寺嚴如上人光勝宗主の三男勝尊との許婚の約

成り、更に洋學を修め讀書裁縫に勉め、傍ら詩歌琴書を勵み、婦女の嗜み缺くる所なし。明治十五年四月十五日女史十七歳にして入嫁し、皆山邸に一家をなせり。爾來夫に事へて貞淑、舅姑に侍して恭順、よく家事を處理し、人に對するや溫雅、對應周到にしてよく事に當り、また内顧の憂なからしむ。已にして二男一女を擧げたるも長子三女は夭し、單り次子のみ保育を全うし得たり。明治十八年三月次子を產むや大患に罹り、生死の境に在ること旬日、將に息絶えんとせし時遽かに迅雷ありて附近に墮ち、愕然として胸開け病忽ち愈えたり。女史雷を嫌ふこと甚し、而かも雷に依りて回生を得、人皆これを異數となすといふ。

その頃京都市に慈善會の設立あるや率先入りて他を誘導し、會の隆盛を助く、偶〻昭憲皇太后會場に臨御し給ひ、特に謁を賜はる。後佛教婦人協會を創立して副會長となり、婦道の振作と佛教思想の皷吹に盡せり、是れ京都市に佛教婦人會あるの嚆矢にして、本願寺婦人會あるの始となす。又旭女學校を興し、門末教徒の子女の薫陶に當らんとせしが、その基礎略〻成りて未だ果すに至らず。明治二十五年春苟且めの病を得て復た起たず、四月二十一日を以て歿せり。享年二十七歳。法名を攝護院釋嚴暉禪尼と號す。知る人皆追慕して措かず、嚴如上人亦た深く之を悼み、左の二首を贈らる。

嚴暉禪尼の月忌によみて贈る

言の葉のはなのおもかけ遠き世にかすむやそてのなみた成るらむ

したふかな誘ふあらしにはかなくも散りてかへらぬ花の遊くへを

春

歌

初春鶴

梓弓はるたつそらに千代よはふ田鶴かすかたそのとけかりける

初霞

朝日かけまはゆからぬは春きぬと空にかすみのたちそめぬらむ

海上霞

けふり舟ゆくと見るまにかけきえてあとになひくは霞なりけり

あまのたくもしほのけふり立こめてかすみたなひく春の夕なき

湖上霞

あつさ弓矢はせをさしてこくふねもふかき霞のそこやゆくらん

霞春衣

さほひめの霞のころもはるのきてやなきさくらやかさし成らぬ

待鶯

こち風のふきおくりたる梅か香にはやたち出よたにのうくひす

初聞鶯

ふる雪を梅の花かとまかひてやけさうくひすのまつ來なくらむ

谷の戸をいつかいてけんめつらしく初音の里にうくひすのなく

野外鶯

しつの女かころもはる野をわけゆけはかすみのおくに鶯のなく

雪中若菜

ふりつもる雪かきわけてもろともに千代をふる野の若菜摘てむ

餘寒氷

春もまた淺澤みつのあさな〳〵さえかへりつゝうすこほりせり

雪中梅

ゆきなからかをり身にしむ梅の香にこのひとえたの盛をそしる

梅花盛

花の香のそらもおほろにかすむまて月の瀬やまはうめさかり也

霞中梅

はるかせになひく霞のたもとよりあまりてにほふ野邊の梅か香

梅薫風

春風の袖にふきくるうめか香をたかうつりかとひとやとかめむ

閑居梅

世をすてしすまひも春はさく梅の香をなつかしみ人そとひ來る

柳風

春風のさそふまに〳〵あを柳のいとまなけにもうちなひきつゝ

野若草

野邊ははやはるめきそめて春雨のふるねにもゆる草もありけり

雨後若草

春雨のなこりのつゆもなつかしくぬれていろます野邊のわか草

早蕨

花見にとみちのゆくてのはつ蕨をりてやけふのいへつとにせむ

春山月

やまのはのはなのひかりにかけきえておほろにゝほふ春夜の月

曉春雨

さしくしのあかつきかたの春雨にむすふ夢ちもしめやかにして

庵春雨

山はとのこゑのしめりにしられけりふるもおとなきいほの春雨

しはの戸ののきのいと水たえ〳〵にこゝろほそくも春雨のふる

鶯の聲を聞けるあしたよめる

谷蔭も雪やきえけんはるさめのふる巣をいてゝ來なくうくひす

あさほらけかすみてふれる春雨にはなかさきてそうくひすの啼

野　雉

春の野のすみれつみ〳〵行人をおとろかしてもたつきゝすかな

雲　雀

あそふ糸やつなきとめけむおちかねてそらにたゆたふ夕雲雀哉

曲　水　宴

から人のうかへそめにし盃のあともくまるゝけふにもあるかな

野　雲　雀

かすみつゝこえのみもれし雲間よりやけ野におつる夕ひはり哉

花　處　々

野も山もはなのさかりになりしより千々にくはるは心なりけり

雨　中　花

おなしくは花の木かけにいこひなむふる春雨にそてはぬるとも

曙　花

きぬ〳〵のわかれをしむかあけほのゝ露にぬれたる花のおも影

雨　夜　思　花

夜もすからふる春雨にきのふみしさかりの花はいかゝとそ思ふ

池　邊　花

花の香にかゝみの池もくもるまてみきはのさくらいま盛りなり

名　所　花

よしの山花のさかりはみねも尾もたゝしろたへに雲そかゝれる

花　下　友

あかす見るはなの木蔭にみやひをのこと葉の花も咲かはしつゝ

夕　落　花

春といへとゆふへさひしき鐘の音にあはれをそへてちる櫻かな

暮春

花もちり八重山吹もうつろへはあるかひなしとはるはいぬめり

はな鳥のあかぬ色音を世の人にをしまれつゝもくるゝはるかな

春眺望

ひえの山のほりてみれはうち日さすたひらのみやこ霞こめけり

春山

はるもまた花のしら雲かゝらねとみとりにかすむひむかしの山

春旅

いそかるゝ旅ちなからも立よれはくるゝもしらぬ花のしたかけ

春地儀

若草のこゝろものへにもえ出てすみれつはなとあそふころかな

夏歌

杜新樹

うすくこく若葉しけりてこのころは老その杜の名にも似ぬめり

待郭公

古巣へとかへるうくひす言つてむ山ほとゝきすはやくきなけと

尋郭公

朝またきおきゐの里をたつねつゝ人よりさきにはつ音をそきく

初聞郭公

いまゝてはしのふのさとの郭公こよひはつねやもらしそめけむ

夕郭公

郭公たかためなれやしのひ音をくもまにもらすゆふくれのそら

江菖蒲

しら露の玉江のあやめ吹きわたる風すゝしくもかをるけふかな

朝早苗

朝風にみとりすゝしくなひくなりきのふかうゑし小田のわか苗

梅雨久

いつはれんかきりもしらすたま琴の緒さへしめれるまとの梅雨

梅雨晴

くるとあしと雨つゝみしてくつをれし心もはるゝさみたれの空

旅宿水鶏

こゝろなくたゝく水鶏に古さとのをしき夢路をさまされにけり

螢影映流水

さつきやみ星なき夜はの水のおもにうつるひかりや螢なるらむ

名所螢

吹かせにみたるゝ露の玉かはやあし間に見えてほたるとふなり

籬夏草

うなゐらかたけくらへせしなか垣もかくるゝはかりしける夏草

園瞿麥

朝寐かみかきなてしこのいろ〳〵に花さく園をにしきとそ見る

蓮薫風

涼しくもすたれうこかす夕かせのかをるや池のはちすなるらむ

蓮上露

世の塵のにこりにしまぬはちす葉のにほひすゝしくむすふ白露

垣夕顔

くちをしの花のちきりや賤か屋のかきねよそひてさける夕かほ

里夕立

鳴神のおと羽の里にすゝしさをのこしてすくるゆふたちのそら

河納涼

めつらしと小ふねうかへてみやこ人新堀かはにゆふすゝみする

たゝつめは夕かせすゝし加茂川のはしにや秋のわたり來ぬらむ

橋上納涼

ぬれてふく鴨の河かせすゝしさにゆきゝたゝすむ橋のうへかな

納涼風

ゆふかせに雲ふきはらひ月かけもすみ田川原そいとゝすゝしき

晩夏螢

あすちらむ桐の葉山の夕やみにきえみきえすみとふほたるかな

おゝそらはゝや秋かせや立ぬらむさはへのほたる影そうすらく

夏夜夢

みしか夜に長き夢ちは朝いしてみれともいまた見はてさりけり

秋

歌

田家早秋

小山田にわせの穂いてゝなる子縄こゝろひかるゝ秋は來にけり

新秋露

おきそめて秋のけしきをみすまるの玉なす露のひかりすゝしも

桐葉初落

秋來ぬとめにもさやかに見ゆるかなけさ落そめし桐のひと葉に

早涼到

秋かせの身にしむまてはふかねとも袖にしられて凉しかりけり

雨中萩

むら雨のふりゆくまゝにゆらめきて露おきあへぬはきの一むら

行路萩

わけゆけはそてのぬるゝもいとはしな咲みたれたるつゆの玉萩

草花綻

置露もいろ〳〵にして八千くさのえもいはれ野に咲こほれつゝ

かた糸をくるすの小野は八千くさのはなすり衣ほころひにけり

閑居虫

のかれすむこゝろしりてか柴の戸をさせてふ虫の聲しきるなり

遙聞鹿

夜な〳〵に人のなみたやさそふらむ遠かた野邊にしかそ鳴なる

秋のよの月につまこふ鹿の音ははるかにきくも身にそしみける

遠山鹿

おく山にあきのならひとなく鹿のつまこふ聲そあはれなりける

夜聞鹿

さ夜ふけてさむる夢野に聞ゆなりひとりをしかのつまこふる聲

鹿　馴

たけとりにたえすとひ來る山路には人になれてそ鹿のなくなる

新月映露

いとほそき光をわけて露ことにすゝしくやとるみかつきのかけ

待　月

いくそ度いられて山をこえぬらん月をおそしとおもふこゝろは

深夜月

ともしひの油もつきのかたふきて夜ふかきまとに影そさしいる

ふくろふのなく聲ふけてにしまとに月のさし入夜はのさひしさ

閑居月

うきくもゝ心のちりもはらひつゝわかすむいほに月もすみけり

橋上月

もろ人のゆきゝもたえてすみわたる月かけきよき勢田のなか橋

名所月

あきの月いつこはあれとはりまかたすまの浦なみ立まさり見ゆ

月前情

物おもふこゝろのくまのなき夜はも月をしみれは袖そぬれける

前月宴

たのしさはこよひさやけき月影のさすさかつきにたゝへつる哉

月影浮盃

夜もすからめくるうたけのさかつきにゑみてうかへる月の影哉

霰中雁

うすゝみの夕へのきりのたちこめてよみもとかれぬ雁の玉すさ

月前雁

月影のさやけさしるしはつかりのなく音も空にすみわたりつゝ

馬上聞雁

ふるさとのことつてもやと駒とめて聞もうれしきはつ雁のこゑ

千さと行こまのあかきもなつむらむ初雁の音にこゝろひかれて

河上霧

霧こめてそことも見えす舟人のこゑのみくたるよとのかはつら

大堰川はなにかすみしおもかけの霧にもうかふあきのあけほの

月下擣衣

てる月のかつらのさとにきこゆ也うつやきぬたの音まさりつゝ

深更擣衣

さ夜ふけてしつか衣をうつゝとも夢ともわかすきゝあかしつゝ

野鶉

秋の野に花のにしきのとこしめてなにをうつらのわひしらに啼

菊埋籬

へたてなきこゝろをこめて白菊のさきうつみたる庭のなかゝき

菊花宴

おもふとちくみかはしけり千代までもにほふときくのはなの盃

尋紅葉

木〻はみなもみちやせしと初しくれふるの山邊を尋ね來にけり

尋ねみむきのふのしくれけふの霜高ねのもみちそますやはある

紅葉淺深

いかなれはおなし時雨にうすくこく木〻の梢のもみちしぬらむ

庭紅葉

花よりもあはれそふかきくれなゐにいろをそへたるにはの紅葉

名所紅葉

をとめ子かかつらき山に來て見れはやしほの紅葉をりかさす也

もみち葉のいろにてりそふ旭川なみのあやおるにしきなりけり

秋夕聞笛

うき秋と人はいへともふえ竹のふしをもしろくきくゆふへかな

なみたさへもよほすふしと聞えけり秋のゆふへの笛のしらへは

田家興

ゆたかなる田つらのさとも秋はてゝうふすな祭にきはひにけり

新しほりくみかはしつゝ豐けさのほにあらはるゝ小田のふせ庵

案山子

もの皆のかはりゆく世に今もなほ弓矢手にとりもるかゝしかな

暮秋雨

ちりかゝるもみちにそゝくむら雨はあきの名こりの涙なるらん

冬歌

初冬時雨

ゆく秋のかたみにおきし袖の露かわきもあえずふるしくれかな

庭落葉

かきよせて酒あたゝむる人もなし紅葉ちりしくかくれかのには

河落葉

山姫のむすふにしきのおひなれやもみちなかるゝ谷かはのみつ

残紅葉

つゆしものおくれて染しもみち葉や過にし秋のかたみなるらむ

籬残菊

かくてこそ千代のすかたは見えにけれ霜のまかきにゝほふ白菊

田上霜

苅はてし門田のひつち穂にいてゝ霜のはなこそさきそめにけれ

ひきすてしゝつかゝと田の鳴子なは一すちしろく霜そむすへる

氷始結

玉霰まろふを見れはいけみつの夜はのあらしにこほりそめけむ

ともねする床いかならんをし鳥のならひのいけも氷りそめけり

谷川氷

かせさえて落葉もともに氷るらむなかれかねたるたにかはの水

寒月

霜と見え雪とまかひて冬のよのそらさえわたるつきのかけかな

霰散風

木からしにふきこほさるゝしひの實の中にましりてふる霰かな

霜夜鶴

霜になくたつか音かなしさ夜更て妻やこふらむ子やおもふらん

夜もすからかしらに霜のおけとなほおいせぬものはわかの浦鶴

池水鳥

をしかものさわく羽かせに浪たちて水のあやおる池のおもかな

蘆間水鳥

冬かれてまはらになれる蘆はらにこのころしけき水とりのこゑ

寒夜衾

をさまれるみ世のめくみにあつふすま賤もかさぬる冬の夜は哉

峯初雪

ひかし山いねたるまゝにしろたへのふすまかさぬる峰のはつ雪

この朝けこと葉のはなとなりにけりむかひの山のみねの初ゆき

遠山雪

寒かりしきのふのかせのいろみせて雪をいたゝくひえのとほ山

雪中望

玉たれをかゝけてみれはこの朝け雪よりほかのいろもなきかな

月前雪

よひなからつもりし雪に月さえて山のはしらみからすなくなり

炭竈

炭かまのけふりに空のくもるまてなひくもさむきおほはらの里

爐邊閑談

行末をかけてそかたる釜の湯のにたるこゝろのともをつとへて

おもふとちあかき心のうつみ火をかきおこしつゝかたる夜は哉

歳暮近

花もみちみしもしはしの夢にして今年もくれとなりにけるかな

歳暮霰

ゆくとしをゝしむ涙の玉あられこゝろも千ゝにみたれあひつゝ

市歳暮

市人のゆきかふこゑのたゆるこそあはれことしのわかれ也けれ

待春

まとのもとにうめをうつして鶯のたえすとひ來る春をこそまて

春近

むすほれし瀧のしら糸とけそめてのとけき春をくりかへすらむ

戀歌

逢　戀

人しれすなひきそめたる花すゝきそのうれしさはほに出にけり

不　逢　戀

まれにたにあひ見むことはかた糸のいとゝくるしき戀もする哉

名　立　戀

津の國のなにはたちけりあふ夜はの枕のちりもはらひあへぬを

互　思　戀

君と我おなしおもひにくれ竹のよのうきふしもともにこそせめ

祈　神　戀

貴船川あふ瀬をかけていのりしも神はよそにやきゝなかしけむ

寄　雲　戀

大そらにうきたる雲のさためなき君かこゝろそつれなかりける

寄　霧　戀

秋といへは心のうちも霧こめてむねのおもひのはるゝ間そなき

寄　雪　戀

玉章のかよふ道さへあとたえていとゝおもひのつもるしらゆき

寄　風　戀

身にしみてうれしかりけり吹風のまつにこたふる君かおとつれ

寄　河　戀

わかそてにたえすなかるゝ涙川ひとめつゝみもくえんとすらむ

寄　石　戀

よそにのみかたしと見せて木の葉石君かこゝろの散やすくして

寄　虫　戀

夕されはたれをまつむし啼なへにわか身もいとゝ戀まさるらん

寄螢戀

かくはかりもゆる思ひをそれとたにひるの螢のしらぬくるしさ

寄笛戀

笛竹のちかく聞ゆるひとふしはこよひわかまつ君にやあるらむ

寄枕戀

あふまてはちりもはらはしなつかしき君とかはしゝつけの小枕

雜歌

旭似鏡

千早ふる神代なからにつたへたるかゝみと見えていつる日の影
天の下てらす日かけや朝ことにみかくこゝろのかゝみなるらむ

雨後水

名にも似す音無川のおとするはきのふのあめのなこりなるらん

嶺松年久

高千穂のみねのおい松ふくかせや神代なからのしらへなるらむ

松色久

幾千代も色のかはらぬひめしまの松のみさをにならへとそ思ふ

松色映水

かけうつすときはの色になかれけり千代をちきれる松のした水

名所松

千代かけて枝さしかはしあひおいにふたりならひのをかの老松

島松

つるかめのあそふよもきか島松に千とせをよはふ風のしつけさ

閑居夕

夕されはさひしきいほもにきはひてねくらにかへるむら鳥の聲

閑居苔深

やま蔭のいほは日かけのうすけれは苔のむしろを敷かさねけむ

山家水

山かけのほそきなかれのこけ清水こゝろをすます友とこそなれ

山家夢

あはれ我身をおく山にのかれてもむすふ夢路は世にかよひつゝ

田家眺望

ふしよくもうたひつれつゝ賤の女か竹田のさなへうゑわたす也

仙家鶴

洞のうちにいく年月やつもりけむ雪にまかへるつるの羽ころも

竹林雀

くれ竹の千代の林にやとしめてうきふしゝらぬむらすゝめかな

深林猿

おくふかくしけるはやしに木の葉猿友よひかはす聲もかしまし

牛

おのか名のうしと人にはいはねとも重荷をはこふ身をやわふ覽

鏡

朝夕にむかふかゝみのなかりせは我おもかけもしらてすきまし

うちむかふすかたのみかは心をもうつし見よとのかゝみ也けり

衣

とつ國とましはりひろくなるまゝに衣のそてはせはくなりつゝ

燈下讀書

史よめは見ぬ世の人もともし火のまたゝく影にあふこゝちして

惜寸陰

つかの間も心ゆるさすつとめよやふたゝひかへる月日ならねは

曉述懷

なかき夜のゆめはのこらぬあかつきの名こりは物を思ふ也けり

世路如夢

覺るほとはいつとしらねと辛き世のうきもつらきも夢と社しれ

開化祝

ひらけゆくみちのちまたの民草にかゝるめくみの露そあまねき

陶淵明

世に高きしらへなりけりつま琴に思ひをのへてかきならしつゝ

幼稚園

このそのにうゑてやしなふなてしこの花咲ときをまつそ樂しき

小學校

行すゑは國のはしらとなりぬへし文のはやしにあそふうなゐ子

觀兵式

立ならふもゝ千よろつのつはものも筒のひゝきはひとつ也けり

寄藤懐舊

むらさきの雲にゆかりの藤の花たなひく見れはむかしこひしも

故内大臣三條公の追悼に春後思花

天地にかをりみちたるさくら花ちりてのゝちもわすれかねつゝ

井伊直弼公の三十三年に懐舊といふ題にて

とつくにと往來のみちも開けゆく御代のもとゐをたてし君かな

嘉枝宮の一周の御忌に寄雲懐舊

まゝし世をおもひいてゝは浮雲のきえにし空をうちなかめつゝ

香川景樹大人の五十回の追悼に花間鶯

幾春もかはらてにほふ花かけにむかしゝのふかうくひすのなく

寄盃祝

すゑとほくきみさかえよと盃に千代をたゝへていはふけふかな

播磨なる本德寺の眞香院の尼君の還暦の賀に松契久といふことを

千代へなむ君かよはひは高砂のまつにかけてやちきりおきけん

心の鏡てふ雜誌の日ましに盛なるを祝ひて

世人のこゝろのかゝみ日に月にみかゝれてこそひかりますらめ

明治二十二年の春の頃よりたゝならぬ身となりていとうれしふおもひしにはやうみ月にもなりて十日といふ朝いとかはいらしきをみなの子をまうけたれと露はかりの命にて身まかりぬれは

わか脊子か心なくさむはしにもとたのみてまちしかひもなき哉

越路におわすわか脊の君のもとにふみおくりまゐらすに雁といふ題にてよめる

こし路なる君をおもへは來る鴈の聲きくたにもなつかしきかな

日こと〳〵越路の空をなかめけり雁のたまつさまちわたりつゝ

文詞

夕春雨

春の日のなかきもたそかれ近くなりぬれはふつくゑかひやりつつ窓の戸ほそめにあけてなかむれは風もしつかに吹おくる梅か香うちしめりつゝそこはかとなしあはれにかすむさま軒の玉水おとたてねと小雨やふり出しけんと思はれて

賤の女かころもはる雨ふるとしもしらてやすきんかすむ夕は

雨夜思花

やよひのそらのうらゝかに遠近の山の端そこはかとなしえもいはれぬさまにうちかすみつゝ何となう心もうきたつまゝに四方山の花もさそなとおもはれて日ころしたしき友とちとあすは櫻かりせんとちきりおきけれはわりこなと何くれとゝりそろへころもなともあれにかせむこれにかせんとゝり〳〵によそほひつゝ其日もくれにけれはおのかしゝねやのうちにいりぬれとあすのことなと思ひつゝけていねかたきにふと軒のしつくのつふ〳〵と枕にひゝけはいとひむなしとこゝろまとひつゝ宵のほとはおほろに月もかすみけれと春の夜のならひと思ひかけさりしものをあすはいかにせましなとおもひつゝけて

さくらかりあすとちきりしこよひしもしつ心なく春雨のふる

されとまた雨にぬれたる花のかほはせも色まさりてなか〳〵にゆかしからむよしやふるとも見にゆかんと思ひさためてまたまとろみぬ

あらし山の花見にものしける記

四月十一日けふなむ土曜日なれは此ほとより學校にかよはせつる子の午後はやすみといふにみな〳〵打つれてあらし山の花見に行てむと朝またきよりとり〳〵によそほひつゝひるすくる二時といふころ家をいてぬ

をさなき子のならひとてともなひゆくをいとうれしきことに思ひつゝ途すからなまおほ江の唱歌なとうたひつゝ行ほとにみちもいと遠けれは車にうちのりつゝみちすからこゝかしこ今をさかりとにほふ花に賤か屋のあれたる軒もおほはれていとゆかしう見ゆるもをかしうつまさといふ處にいたりしころ小雨ふりいてゝいとわひしと思へと此わたりまて來しものを止なんはいとくちをしよしやぬるともなといひつゝかさなとのそなへもなけれはほろといふものをうちかつきぬかくては野山のなかめもなく何處へ行くともわきまへぬほとにこゝなりとて車をとゝめけれと雨は猶降りやますそゝろありきもしかたけれはほとゝきすといへる亭につきぬ山にむかへる高とのにのほりてまつこゝかしこ見わたすに嵐の山のはより大堰川のかは面かすみわたりて此ほとよりも江そめし木々の緑も雨にぬれていとゝ色ましたる中にひとむらの雲か消殘りたる雪かと見えて

ひとしほしろきはけに名におふ花の盛りなりけり雨にそほぬれて花のひとひらふたひらちりかゝるも中々にえもいひしらぬけしきになんあるは小艇に棹さしつゝのほりくたる人々わりこなとひらきてかたみにくみかはすうたけの聲もいとをかしあるは川瀨をはしる若鮎なとつらむと糸たるゝもありあるはをと女らかおもけにあか裳かゝけて渡月橋といふはしをわたりて地藏尊へまゐるもありおのかしゝさま〳〵なれと花をめつるこゝろはおなしからむなと思ひつゝくるもいと興ありかくてわかともなひつる子ともの舟にのる人を見てわれものりてむなとむつかれと雨にぬれんもいとわひしけれはとてなためつゝおものなとたうへさせて日もやゝ暮近くなりかつは家にのこりたまふ君のうへもいかゝとこゝろにかゝれは名こりはつきねといさとて花にこゝろをのこしつゝ日のくるゝころ家にかへり着ぬ

けふの人々の花見のさまをみて

あらし山花見にとけふこし人の言葉のはなもいまさかりなり

懐　舊

父君かくれさせたまひしよりことしはゝや七とせとなりぬされはその

よしわか脊の君にこひまをしけれはおこそかに法のわさつとめたまひぬ

日ころより朝な夕ないましゝそのかみの思ひいてられつるにましてけふ

のゝりのむしろにそのむかしのいとゝしのはれて五月の雨のはれまなく

わか袖も朽つるはかりにふりしきるなみたとゝめかたさに

寄五月雨懐舊といふ題にてよめるうた

さみたれもわか袖よりやふりぬらむありし昔を偲ふなみたに

秋夕聞笛

いつはあれと秋のゆふへはことにかなしきをましてこのほとよりわか

脊の君の越路へとものしたまひいとゝさひしさの身にしみつゝなにとな

うかなし涙さへもよほさるゝをりしもふとゝほかたに笛の音のいとふし

をかしうふきすさめるを風のまにまにさそはれて間近くなりぬかゝる物

おもふ身にはいとゝあはれまさりてきこゆ

折にあへはふしおもしろき笛竹の音をさへいとゝ哀とそきく

先妣玉蘭女史旭子逝きてより茲に五十年、今年四月二十一日はその正忌に當る。顧れば往時茫として唯夢の如く、幼時の事のみ思ひ出でられ、その養育の慈愛に滿てる、その薫陶の嚴格なりしとは吾が終生忘れ得ざる所、父また世を去りて三十年に幾く、その間母の年忌も事に阻まれて營み得ず、幼時もとより孝を盡さず、生時已に母に大患を齎らし、その逝けるも吾が病が因ともなる、且つ末期の誡誨は尙ほ殘りて耳底に在りて未だ果すを得ず、省みて誠に慚懼に堪へず。母はもとより歌人にあらず、唯歌學の家に生れ、幼より和歌に親しみ、年少の頃より時に隨ひ折にふれて詠みなし、嫁しては父と共に詠みかはして樂しみとなし、時に拜鄕蓮茵近藤芳介兩大人の批正を得たるのみ。又早くより漢詩を學び、畫と共に好んで詩を作り、父が詩に唱和して感懷を詠ぜしもの亦た少なからず。和歌はその短命なりしに拘らず多數に上り、詩稿と共に詠草も數多かりしが、既に散逸燒亡して殘す所殆んどなく、唯和歌のみ母の逝後父が集めおきて冊子とせるものゝ殘れるのみ。年次もとより明かならず、長短亦た相雜はる。今その中より採り、遺漏を併せて二百首となし、新たに遺詠の歌集を編し、その風懷の一端を偲び、聊か追慕の資に供せんとす。世に五十年を一代佛事の終と云へり。幸に生を得て茲に五十年の佛事を營み、この歌集を供へて吾が孝道の至らざりし罪を謝し、報恩の終となす

を得るは冥加之に過ぐることなし。今や遺詠を上梓するに當りて之を閲すれば、一々往事眼底に浮び出で、思慕の念益〻切にして、風樹の歎愈〻深く、追憶の涙滂沱として止まる所を知らざるなり。

母が五十年忌に追懐の心をのべて詠める

散る花に名残をとめて去りましゝみあとしたひて五十年を經ぬ
五十年を母のみめくみさひしらにいたきひめたる我か胸そうき
きひしくそしつけましけんたらちねのみ影拜みて我はくゆなり
手をとりてをしへたまひし五十年のむかし偲ひて我はなくなり
つむりなてゝ汝か行末のさきくあれとみ言し思へは涙こほるゝ
散りのこす花の色かをしたひわひてさひしくも經ぬ五十年の春
ふた度はかへりきまさぬみあとおひて涙せし我の老にけるかな
五十年ののりのいとなみ淨き世の花のうてなにみそなはすらむ

此の歌集はもと「旭のにほひ」と題し集めたるものに據り、その近藤芳介大人の序と故姉德川瑛子の和歌文詞を附錄せしを省き、本歌も誤字を正し、割愛に委せるもの多し。尙ほ序文を請ふ可きなれど、知る人もなくなりしを以て略し、小傳に代へたり。編輯校正等には伊藤惠・松谷彰乘の二君を煩はせり、茲に記して謝意を表す。

昭和十六年三月

京城南山麓倭城臺僑居にて

大谷勝眞識す

昭和十六年三月廿五日印刷
昭和十六年三月三十一日發行　（非賣品）

大阪府中河内郡八尾町
八尾別院
編輯兼發行者　大谷勝眞

京都市下京區北小路新町西入
印刷者　須磨勘兵衛

410
448

終